

奄美群島におけるエコツーリズムの 展開とその特徴について

宋 多情

The Development and the Features of Ecotourism in the Amami Islands

SONG Da-jeong

鹿児島大学大学院 人文社会科学研究所
Graduate School of Humanities and Social Sciences, Kagoshima University

要旨

エコツーリズムは、持続可能な観光の一形態であり、ガイドとともに自然を観察・体験しながらその地域の自然環境及び歴史・文化を理解する観光概念である。エコツーリズムが展開される目的と方法は、地域と実践する主体によって様々である。本稿では、行政・ガイド・地域住民の3つの視点から奄美群島で展開されるエコツーリズムの特徴を明らかにした。

はじめに

日本にエコツーリズム概念が本格的に導入されたのは、1990年に開始された環境庁による「自然体験活動推進方策検討調査」(知床、立山、奥日光、八丈島、屋久島)と「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」(西表島)の実施がきっかけである。そこで、本稿では、奄美群島におけるエコツーリズムの展開とその特徴について検討し、ホストの視点から行政・ガイド・地域住民の3つの主体を想定した上でそれぞれの主体がエコツーリズムにどう対応してきたかを明らかにする。

行政主導のエコツーリズム

鹿児島県は、2001年の『21世紀新かごしま総合計画』において、エコツーリズムを「自然を生かした地域づくり」の方法として取り上げた。さらに、奄美群島では『奄美群島自然共生プラン』が策定され(2003年9月)、世界自然遺産登録を目指すことを重要施策として示した。

2007年、奄美群島12市町村の全群島的な業務を担当する奄美群島広域事務組合に世界自然遺産推進係が編成されることで、世界自然遺産と関連づけられたエコツーリ

ズム推進事業が群島内で実施されるようになった。最初の取り組みとして、奄美大島（2008）、沖永良部島（2012）、喜界島（2013）、徳之島（2013）に「エコツアーガイド連絡協議会」を発足した。

ガイドという存在

1980年代後半から自然観察会及び自然保護運動が展開された奄美大島には、1990年代半ばに、すでに現在のエコツアーガイドとして位置づけられる人々が活動をはじめていた。彼らは、独自にツアー形式を構築し、自然体験などとして位置づけ、ガイド業を展開していた。そして、日本エコツーリズム協会の発足（1998）をはじめとする諸組織の動きからエコツーリズム概念に接し、自分たちの実践がエコツーリズム理念と近いものであることを自覚した。しかし、エコツーリズムという言葉に引っ張られることなく、それぞれのガイド業の独自性を重視することを選択した（宋 2017）。この点は、奄美大島ガイド全体に共通するものである。

農業が基幹産業である徳之島は、ガイドを必要とする観光が成り立っていないことから、島内でガイド業に携わっている人が非常に少ない。徳之島エコツアーガイド連絡協議会は、登録ガイドの半数以上を占める NPO 法人徳之島虹の会が代わりにガイド組織としての役割を果たしている。会員のほとんどは、行政のエコツーリズム推進によって、エコツーリズムという言葉や概念に接した。しかし、行政の考え方そのものを全面的に受け入れたわけではなく、エコツアーの中身は、それまでの活動を通じて得られた自然環境に関する知識と理解をもとにしている。

地域住民の認識

近年、地元メディアによるアマミノクロウサギ保護事業に関する報道の影響から、地元住民の周辺環境への認識に変化が生じている。例えば、住用町ではガイドが行うナイトツアーへの関心が持たれるようになり、また、家族や知人を連れてアマミノクロウサギを見に行くことで町内からのアクセスが増えた。その反面、利用増加による環境問題が懸念されていることから、希少動物の輪禍事故防止のために地域住民組織「NPO 法人住用ヤムラランド」の役員たちがパトロールを行うようになった。

しかしながら、エコツアーとして商品化された自然環境の間近で生活を営む地域住民の中で、以上のような変化が見られたのは、ごく一部にすぎず、大多数の関心は薄いといえる。

引用文献

宋多情 2017. 奄美大島におけるエコツーリズムの受容プロセス. 島嶼研究, 18(1) : 35-54.